

# ディケンズとディック・ウィットントン伝承： 『ニコラス・ニッケルビー』における 主人公についての考察

榎本 洋

## 1 Dialecticな主人公たち

ディケンズの登場人物を俯瞰して気づくことは、各々の人物が享受する運命によって、つまり結末において「幸福を享受する者」とそれを「拒否される者」とに大別されることである。とりわけ初期のテキストにはその区分が顕著である。『オリヴァー・ツイスト』（以下『オリヴァー』と記す）ではブラウンロウ (Brwonlow) の庇護を受け、その養子となり、安定した身分と生活が保障されるオリヴァー (Oliver) に対して、教貧院時代の友人であるディック (Dick) は無能な制度の犠牲となる。テキストの後半で落ち着いたオリヴァーがディックとの再会を望みながら果たせぬため、この対比はいやが上でも際立ってしまう。『ニコラス・ニッケルビー』（以下『ニコラス』と記す）も同じである。『ニコラス』ではニコラス (Nicholas) とスマイク (Smike) の対比がそれにあたるが、似たような対立図式は以降のテキストでも様々な変容を経て反復される。例えば『骨董屋』ではネル (Neil) とキッド (Kid) やディック (Dick)、『ドンビー親子商会』（以下『ドンビー』と記す）のゲイ (Gay) とポール (Paul) や、他のテキストではデイヴィッド (David) とステリアフォース (Steerforth) などである。勿論、中期のテキスト以降はより洗練されたもので、単純な図式が該当するものではなく、更なる検討の余地があるだろう。

しかし、少なくとも初期においてこれらの対立図式を支えるのは、成功を得る者ともう一方では社会の犠牲になった者に対する双方の眼差しへの共存という両面価値的な心情である。バドリ・レイナ (Badri Raina) はディケン

ズが直面した社会に対する批判的な反応がディック、ネル、ポール、スマイクのような犠牲者の創造となって現れる一方、世俗的成功を肯定する心情が「幸福を享受する者」という相反する人物たちも生み出したと指摘し、双方のキャラクターに反映される二律背反的な自己イメージについて触れている：“At the same time, though he seeks to project his self-image by transcending bourgeois Victorian values, such transcendence is ... illusory and unsatisfactory to Dickens. ... on the one hand, Dickens seeks to cling rather desperately to an unfelt doctrine of future reward, on the other, ... he simultaneously provides more material satisfaction to the surrogate selves of the children who die ...” (Raina, 38-39)。レイナはそれ以降、こうした矛盾した心情の対立、対照がどのように融和され、解消されたかを個々のキャラクター、テキストにおいて『我ら相互の友』（以下『友』と記す）まで探っている。しかし、ディケンズに葛藤を齎したはずの“an unfelt doctrine of future reward”, “the categories of successes sanctioned by the culture” とかは具体的にいかなる文化現象なのか、事例に事欠くため、議論はややもすれば抽象的で異種同義的な図式の反復に費やされることになる。ここではニコラスとスマイクの対立もさることながら、彼らの想像の源となる“an unfelt doctrine of future reward”をヴィクトリア朝の成功神話である「ディック・ウィットントンと彼の猫」(Dick Whittington and his Cat) という民間伝承にその源泉を求め、その流布した一般的なイメージを検討しながら、ニコラスという主人公がいかなる人物であるかを探る予定である。ところで、「ディック・ウィットントン」の物語は、ロンドンに富を求めて出てきた少年が篤志家の商人に雇われ、財を成し、その娘と結婚して商売を継いで成功を収めるといふ、ジョゼフ・ジェイコブズ (Joseph Jacobs, 1854-1916) 等によってイギリスの伝統的な民間伝承として親しまれている物語である。詳しくは後で述べるが、本論ではニコラスにウィットントンのような要素を認め、結果としてディケンズがこの民間伝承に(本人の意図はともかく)かなり接近したキャラクターを創造したことを見ていくつもりである。ただ、レイナが指摘

するように自己撞着的なイメージをニコラス、スマイクの対立と見るのではなく、ニコラスと何よりもそのような人物を創造したディケンズ本人の中に見ることになるだろう。その矛盾したひずみが他のどんな文学的なモデルよりも、ウィットントンという民衆的なヒーローを作者が（無意識にうちに）選択した契機となったと思われるからである。そこでまず、冒頭の分析を通して一つの時代、文脈の中にニコラスという青年主人公を位置づけることを試みる。次にニコラス、作者ディケンズそれぞれが抱える矛盾と葛藤、同時代の文学状況とニコラスの関係などについて順次、考察していく。さすれば、ディケンズが「ウィットントンと彼の猫」という民間伝承にどのように向き合い、自家菜籠中のものにしていったか、著者特有の営為のありかたが分かるのではないだろうか。

## 2 同時代人ニコラス

『ニコラス』の冒頭はニコラスの祖父の代から一家が、どのような苦難を経たかを事細かに述べるところから始まる。祖父ゴッドフレー・ニコラス (Godfrey Nicholas) はデヴォンシャー在住の“a worthy gentleman” (1) で、年取60から80ポンドそこそこの収入で近隣のご婦人と結婚する。生活は苦しかったがおじのラルフ (Ralph) が亡くなり、5千ポンド余りの遺産を相続すると、デヴォンシャーに“a small farm near Dawlish”を購入して二人の息子と暮らす (2)。二人の息子ラルフ (Ralph)、ニコラス (Nicholas) の兄弟はやがて父の遺産を相続すると、兄は投機で財を成し、弟は“The run of luck against Mr. Nickleby. A mania prevailed, a bubble burst, four stockbrokers took villa residences at Florence, ... and among them Mr. Nickleby.” (5) と投機に失敗して、全ての財産を失い、失意のうちに世を去る。ニコラスが登場するのはそれからすぐ後のことである。一家（一族）の歴史を過去から時系列に沿って現代まで辿り着く手法を冒頭に用いたのは『ニコラス』のみならず、『マーティン・チャズルウィット』（以下『マーティン』と記す）にも同様に見られる。しかし、『ニコラス』が後者と決定的に異なっているのは語

られる時代背景の範囲が、前者が『マーティン』に比べ遙かに限られていることである。『マーティン』の場合、批判される悪徳としての「利己心」が単にチャズルウィット一族、そして個人としてのヤング・マーティン (Young Martin) に体现されているのみならず、広く古来よりそれが連綿と続いているという設定を前提としている。そのため扱う時代は遙か昔のウィリアム征服王に始まりカトリック教徒による火薬陰謀事件 (1605年) を経て現在に至るといふ広漠たる時代に跨っている。つまり「利己心」という言葉は一族、個人の害悪 (private vice) のみならず、公共のそれ (public vice) であるという認識である。『ニコラス』の場合はそれに比べれば、時代は遙かに限定されており、語り手から身近な時代である。再度、出来事の順番を整理してみよう。祖父のゴッドフレーは五年後 (1) に “a little commercial speculation” (2) を考えていた矢先におじの死を知らされる。更に、 “The two prospered so well together that, when he died, some fifteen years after this period, and some five after his wife...” (2) と15年ほど経ち祖父が死去し、二人の息子に遺産を相続したことが分かる。この時点でほぼ20年経過している。二人の兄弟は各々別の人生を歩み、ニコラスは婦人と結婚し、株の思惑買いで失意のうちに亡くなるのは既に言及した。この時点で、息子のニコラス (つまり主人公) は19歳であり、ケイトは14歳 (後に17に変更されている) となっている。こうして物語は40年ほどの時間が経過してニコラスの冒険に辿り着く。

それでは物語の辿り着いた年代はいつごろだろうか。テキストでは30年代の初頭に反響を呼んだマルサス (Thomas Malthus) の『人口論』 (*An Essay on the Principle of Population*, 1798) を彷彿とさせる箇所や (1), 「出生、死、結婚」等の記録を義務化したと思われる1836年の新法が成立する以前とある (4)。また「穀物法」の成立とその反対運動としての反穀物法同盟の結成 (1838) を思わせる箇所 (388) も見られるので、同時代の雰囲気強く滲ませる30年代と考えるのが妥当だろう。ちなみに『ニコラス』の月刊分冊は1838年4月から翌年10月までの期間である。ところで、このよ

うに語り手が存在する現在から30、40年ほど前の過去の時代から溯って語り始めるという手法は、物語の「過去性」、「歴史性」を重視するようになったスコット以来だと文学史家ティロットソン (Kathleen Tillotson) は、その特質をこう指摘する。

There are the special cases of the 'autobiographical' novel and others, including the later family chronicles, which cover a long stretch of time: these 'go back' in order to have room to come forward, but nevertheless usually stop well short of the 'present'. (Tillotson, 93)

ティロットソンは更に近接過去を舞台にした「歴史小説」の成立や「自伝小説」が歴史的な厚みを持たせるために似たような時間設定をして、ブロンテの『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847)、エリオットの『ミドル・マーチ』 (*Middlemarch*, 1872) のようなテキストを生み出したと指摘している。つまり過去の扱いかでは『ニコラス』もこれらの大きなテキストと同じ構えなのである。その意味ではルーカス (John Lucas) が言うように、このテキストはディケンズの最初の大規模な試み ("Dickens' first full-scale novel") なのである (Lucas, 55)。

そこで問題になるのが、指摘されている「自伝性」のことであろう。テキストではニコラスの年齢は19で、ケイトは17である。とりわけニコラスが20くらいの若年であるということは注目に値する。他方、この頃のディケンズは未だ若干26歳の青年文士とはいえ、既に先輩格にあたるブルワー・リットン (Bulwer-Lytton)、エイズワース (W. H. Ainsworth) を人気で凌ぎ、異例の若さでアシーニウム・クラブへの入会を果たしている。つまり、主人公ニコラスは著者ディケンズと極めて年齢的に近く、これほど主人公が著者に接近している例はそれ以降、まず考えられないのである<sup>1)</sup>。従って、著者が主人公に自らを同一化し、感情移入する余地は十分に生じる。ポール・シュリックケ (Paul Schlicke) が指摘するように、ニコラスは「ディケン

ズの理想的な自画像」なのである (Schlicke, xxviii)。1848年の序文の終わりに語られている著者の解説は、主人公ニコラスが等身大の自画像であるということ、暗に仄めかした言い方である。

There is only one other point, on which I would desire to offer a remark. If Nicholas be not always found to be blameless or agreeable, he is not always intended to appear so. He is a young man of an impetuous temper and of little or no experience; and I saw no reason why such a hero should be lifted out of nature. (xlvi)

最後の文言は注目しても良いだろう。“a hero should be lifted out of nature”は、訳せば「生のままの状態から持ち上げる」、「加工する」という意味だろう。要するに「あるがままの自然の状態の主人公」を示すということであり、当然、ディケンズの幾分、理想化された自我が反映される。「自然児」ニコラスの容姿はおじラルフと対比されて、“that (the face) of the young one, open, handsome, and ingenuous”とか、“the light of intelligence and spirit”に輝いた眼だとか、“His figure was somewhat slight, but manly and well-formed;” (24) といった具合に、紋切り型ではあるが理想化されている。後にケンウィッグ夫人が“He has a very nice face and style, really;” (183) と、ニコラスの理想化された有り様を褒めているのも同じである。つまり、「ニコラス」というテキストは、ディケンズの自我がある程度、理想化されて反映され青年主人公という点では、並行して執筆された『オリヴァー』はもとより、『ピクウィック・ペーパーズ』（以下『ピクウィック』と記す）とも大きく隔たるものである。しかも、ニコラス自身が様々な体験の当事者であり、彼ら（ケイトも含めて）の眼を通して見られるのである。従って、「自伝性」を考慮すると、行動するニコラスと語るディケンズの距離はさほど隔たっていないと思われる。それでは、実際にニコラスはどのような体験をするのだろうか。少なくともニコラスが体験する冒険の「質」を考えれば、

ディケンズの意識も垣間見えてくるのではないだろうか。

### 3 ニコラスの「体験」と「体面」

ニコラスの旅、そして遍歴は幸運と富を保証する安定した職を求めて行われる。

ニコラスがお父に勧められてヨークシャーにあるスキイアーズ (Mr. Squeers) の初等学校、「ドゥー・ザ・ボーイズ・スクール」に赴任するのは4章からである。教職に着けば共同経営者も夢ではなく (27)、将来の“the stepping-stone to fortune” (28) とラルフに説得されたのが発端である。結果は学校経営のひどさ、児童の扱い方に憤り、スマイクと脱出するわけだが、安定した地位と幸運を求めようとするニコラスの動機はロンドンへ来ても不変である。ロンドンでは下宿先を決めた後、職安 (Register Office) を訪ねる (189)。そこで国会議員グREGズベリー (Mr. GREGsbury) の秘書を勧められて、そこを訪ねるが、結局は辞退する (200)。そこでケンウィック家の四人の娘に“the weekly stipend of five shillings” (201) でフランス語の会話を教えることになる。ここで一旦、終わったかに見えるニコラスの放浪癖が、またも二人を旅へとかき立てるのである。その理由は旅の座長クラムル (Vincent Crummle) に対して、“I shall try for a berth in some ship or other. There is meat and drink there, at all events.” (282) と説明される。それには“there’s not a skipper or mate that would think you worth your salt” (283) と言われ、船員になり安定した地位を得ようという野望は潰えてしまう。こうした野心自体、スモレット (Tobias Smollett) やマリアット (Frederick Marryat) の主人公を彷彿とさせる。少なくともこの時点では、ニコラスの遍歴は旅する主人公の体裁を保っている。ところで職探しに奔走するのはケイトも同じで、まずラルフの紹介でマダム・マンタリーニ (Madam Mantalini) の許でお針子の仕事を (chp. 17)、そこを追われるとウィティタリー夫人に雇われる (chp. 21) といった具合である。その間、ニッケルビー夫人 (Mrs. Nickleby) は娘がマダム・マンタリーニと共同経営者になる

ことを夢見たり (214)、貴族の夫人の地位に納まる事を想像する (340-1)。それにしても、登場人物は丁度、ラルフが“Work, ma'am, work; we must all work.” (118) と言う様に、なぜ仕事仕事と逸っているのだろうか。その裏にはディケンズが生きた時代の気分が「階級」という形で濃厚に反映されている。

「階級」の問題は「体面」という形でニコラスの職探しにも大きな影を落とす。ノグズがニコラスにフランス語家庭教師の話を持ち出すときは、“small things offer — they would pay the rent, and more — but you wouldn't like them; no, you could hardly be expected to undergo it — no, no.” (200) と念を押され、“What could I hardly be expected to undergo?” と言いつ返すものの、やはり「体面」と「職業」、どうやって「体面」を損なわずに生活していくかという問題は回避できないようだ。結局、“Mr. Johnson”という偽名を用いて、ケンウィッグ氏の家庭教師を引き受ける (203)。クラムル一座に役者として雇われたときも同じである。公演で儲けた利益を一部、ノグズを介してケイトに送るとき、妹に“the warmest assurances of his love and affection”は伝えたものの、“He made no mention of the way in which he had employed himself” (374) とどうやって稼いだかは、不問に付したままである。ここでも偽名を用いており、ケイトの身に危険が迫っていると知らされるとあっさり退団を決意する (382)。クラムルに本名を打ち明け、事情を話すのはこれよりずっと後のこと (629) である。

「体面」を気遣うのはニコラスのみではない。職業の選択、生活様式、暮らしぶりにおいて「体面」に捕らわれている人々が多数、登場し、ニコラス、ケイト、双方の視線から批判に曝されている。ニックルビー夫人はケイトの不安をよそに、ブラック (Mr. Pluck) とパイク (Mr. Pyke) に“her fallen fortunes”を嘆き、かつての栄華を示す“a picturesque account of her old house in the country” (347) について長広舌をふるう。ケンウィッグス一家も、とりわけ夫人は“a very genteel family” (162) の出身と見なされており、一家が催す上流気取りの甚だしいディナーには、これまた貴族志向の強



いおじのリリヴィック (Mr. Lilyvick), 女優のペトーカー嬢 (Miss Petowker) が招待されている (163)。その彼らがニコラスを“Ah! Aristocratic”と評する箇所はその階級志向を露にしている (184)。しかし、ニコラス以外に強烈な階級意識の持ち主に会おうのはケイトであろう。ケイト本人は、ニコラスのような「体面」とは余り関係ないため、その体験は余程、純粋で印象的である。マンタリーニの店では“a liveried footman”が彼女を出迎え、“an immense variety of superb dresses and materials for dress”が散乱した“the show saloon”へと招き入れられるといった具合である (123)。もともと Muntle という名前を、営業上の理由で今の名前に変更したという夫婦の生活は、華美を極める。マンタリーニの気取った外見も“Such a fine tall, full-whisked dashing gentlemanly man, with such teeth and hair” (211) とナッグ嬢 (Miss Knag) の賛美的になる。しかし、この弊害が一番、著しいのはケイトが次に出入りするウィティットリー夫人である。そもそも住所のカドガン・プレイス (Cadogan Place) が貴族主義的なベルグレイヴ・スクウェア (Belgrave Square) といささか落ちるチェルシー (Chelsea) との“the connecting link” (264) という中間的な実態にも拘わらず、“They affect fashion too, and wonder where the New Road is.” (264) とか、“Wearing as much as they can of the airs and semblances of loftiest rank, the people of Cadogan Place have the realities of middle station” (265) といった具合に、実態とうわべの隔たり具合が批判の対象となっている。生活も貴族を真似たものである。“the plated button” (421) をした召使に案内されて部屋に入ると、夫人はソファーに寝そべってケイトを出迎える (265)。また夫は“she is an ornament to the fashionable world, and to you. Her companion is soul. It swells, expands, dilates—the blood fires, the pulse quickens, the excitement increases—Whew!” (267-8) と妻を呼び、気取ったやりとりが日常的に日撃される有様である。夫人はブラックに公爵夫人に似ているといわれて、機嫌を直す場面もある (362)。

強固な階級意識は登場人物の内輪の世界を超えて見られる。ノグズがケ

ンウィッグスに頼まれて、彼の娘を近所の理髪店へ連れて行く箇所がある。“people of a coarse and vulgar turn of mind might have called it a barber’s” (684) という貧相な構えの店だが、やってきた“the coal-heaver”は“*We don’t shave gentleman in your line*” (685) と言って追い返されるのである。さらに店長はこう付け加える：“*It’s necessary to draw the line somewhere, my fine feller*” (685)。「どこかで線引きする必要がある」とは秀逸な答えである。そのせいだろうか。このテキストでは、ロンドンの街も必要以上にくっきりと二分されているように思われる。ラルフが住む“Golden Square” (6) 界隈の様子や、“the richness and splendour of the furniture” (233) で目も眩むばかりの室内の様子。そして、ウィティッターリー夫人の家の豪華な様子 (265)、マンタリーニの館 (123)、そしてサー・マルベリー・ホーク (Sir Mulbery Hawk) の“a handsome suit of private apartments in Regent Street” (331) といった瀟洒な邸宅など、贅を凝らした住居は結構、目に付く。もちろん、別の風景も確実に存在する。ケイトの身に危険が迫っていると知らされたニコラスは、急遽、ポーツマスより戻ってくる。久々に戻ってきたニコラスの視界に投じたロンドンの光景は、“Life and death went hand in hand; wealth and poverty stood side by side; replention and starvation laid them down together” (409) と生と死、富と貧困が融和しがたく、対立した世界である。同様の感慨はグライド (Glide) との結婚を思いとどまるように、マデライン・ブレイ (Madeline Bray) を説得するために彼女の家へ向かう時、ニコラスの脳裏を去来する (693)。社会的な格差と不公平に憤りの眼差しを向けるのは、並行して執筆していた『オリヴァー』も同じである<sup>2)</sup>。しかし、決定的に異なる点もある。それは『オリヴァー』のジェイコブ・アイランド (Jacob Island) に当たる具体的な地名を持った貧民街の綿密で、微細を極めた描写が『ニコラス』には見当たらないのである。そのため、テキストを見る限り、それとは正反対のリージェント・ストリートなど富裕層の街角の描写が優勢を占めていることである。これはなぜだろうか。次章では『ニコラス』におけるジェイコブ・アイランドの不在について、主

にディケンズ本人の事情に即して考察する予定である。

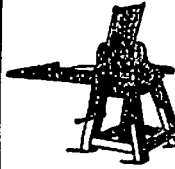
#### 4 ディケンズの「体験」と「体面」

それでは『ニコラス』執筆時の著者には、どのような事情、身辺変化があったのだろうか。『ニコラス』は19冊の月間分冊で1838年の4月から翌年の10月までの間にチャップマン・ホール社から出ている。分冊刊行の売れ行きは好調で、連載時の評判は『ピクウィック』と同じ水準を維持していたという (Page, 96)。ニコラスのプロマイドも別売され、演出用の出し物として結構な評判を得たという。つまり、どちらかというとき低く評価されている現在の『ニコラス』とは対照的に、出版当時の『ニコラス』はかなり高い評価を受けていたのである。高い評判はディケンズの公的な活動範囲の広がりやを齎す。異例なことに、26歳の若さで貴族的なアシーニウム・クラブ (the Athenaeum Club) への入会が許可され、またホランド・ハウス (Holland House) へ招待される。38年7月21日のことである (ちなみにヴィクトリア女王の戴冠式はそれから一週間後に行われた)。そして、5月には既に Artist's benevolent Fund で講演し、名実共に若手実力派の作家として認められるようになり、“aristocratic circles” (Monod, 147) への出入りも比較的容易になる<sup>3)</sup>。そのためテキストに限ってみれば貴族たちの社交場としてのクラブ、カジノ、競馬場などへの言及が目につく。例えば、ラルフが言うように、ホーク卿がニコラスと喧嘩をし、打ちのめされた噂でどのクラブも持ちきりだと言うし (491)、大陸に逃亡していたホーク卿が人前に姿を見せたのもハンプトン (Hampton) の競馬場である (653)。更に、ホーク卿とヴェリソフト卿 (Sir Frederick Verisoph) が“a profligate of the worst repute” (663) といういかかわしいクラブで大喧嘩を演じる箇所もある。『ニコラス』のクラブは『ピクウィック』のそれに比べて、遥かに階級性が濃厚である。後の『大いなる遺産』(以下『遺産』と記す) でピップ (Pip) が出入りするコヴェント・ガーデン (Covent Garden) あたりにある Finches of the Grove の先駆けと思われるが、それに比べても貴族性は濃厚である。『ニコ

ラス』のこうしたクラブとそこに集う貴族たちが批判に曝されていることは言わずもなである。いずれにせよ著作家としてのディケンズの地位の向上が、体験の幅を広げ、閉鎖的な階級クラブの内情を取り入れるのに役立ったと思われる。その結果、『オリヴァー』には類を見ない程、貴族、上流志向が目立つ中流階級以下の人物が大きな比重を占めるのである。

ディケンズ自身の意識が登場人物のそれに反映していることは既に述べたが、著者の階級意識は『ニコラス』の月間分冊にも表れている。ここでは、ディケンズは分冊に贅沢品の広告をふんだんに乗せ、読者の貴族的、又は上中流への生活様式への志向を煽っているのである。ギルモア (Robin Gilmour) が指摘しているように、分冊のテキストの前後を占める広告を仔細に検討すると、いかにディケンズ、編者、出版社の三者が貴族社会やそれを目指す上・中産階級を意識していたかが分かる (Gilmour, 110)。その内容も、モーツアルトの楽譜新版について、“Reform your Tailor’s bills!”, “City clothing establishment”, “The hand-book of gardening”, “Frank’s great hat store”, “Gibbon in monthly volumes” など消費志向は勿論、知的な関心に答える広告体となっている (図版①参照)。つまり、ディケンズが思い描いた人物 (と読者) はヴェヴレン (Thorstein Veblen) が言う「衛示的消費志向」 (“conspicuous consumption”) に捕らわれた人々なのである。そうした消費志向、奢侈の役割についてヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart) は『恋愛と贅沢と資本主義』 (*Liebe, Luxus und Kapitalismus*, 1922) の中で、「奢侈は近代資本主義の発生を、各種各様の面であがした。たとえば奢侈は封建的な富を市民的な富 (負債!) に移行させるうえに、本質的な役割を果たした。それとともに、一般的にできるだけわかりやすくしたうえで、奢侈の市場形成力を考慮に入れなくてはならない」(190) とその強力な影響力を述べている。つまり、この頃のディケンズが目当てにした貴族社会は「奢侈の市場形成力」が一番、力の与ったところである。だとすれば、テキストに「体面」にこだわる人物がこれだけ多数出場するのも、こうした社会、奢侈を可能にする世俗的成功という価値観に対するディケンズの愛憎半

The Nickleby Advertiser.



# LITHOGRAPHY.

AT S. STRAKER'S Lithographic Establishment,  
3, GEORGE LANE, LOMBARD STREET, LONDON.

Drawings, Maps, Plans, Elevations, Fac-Similes,  
and Writings, of every description,  
Are executed in the best Style, with the utmost Expedition, and on the most moderate Terms.

STRAKER'S LITHOGRAPHIC PRESSES

To receive a Stone 8 by 14 inches 25 lbs.; 14 by 18 27 lbs.; 18 by 24 29 lbs.; 20 by 25 42 lbs.  
124 longer Size in the same proportion.  
Stones and every Material and Instrument used in the Art on the lowest Terms for Cash—  
Stones on Hire, and forwarded to any Part of the Kingdom.—Country and Foreign Orders  
promptly attended to.

## REFORM YOUR TAILORS' BILLS

### LADIES' ELEGANT RIDING HABITS.

|               |       |
|---------------|-------|
| Summer Cloth  | 3 0   |
| Ladies' Cloth | 4 4 0 |
| Seasony Cloth | 5 5 0 |

### GENTLEMEN'S

|   |        |
|---|--------|
| Superfine Dress Coat  | 2 7 6  |
| Extra Seasony, the best that is<br>made                       | 2 15 0 |
| Superfine Frock Coat, silk<br>Facing                          | 2 10 0 |
| Horseshin Trowsers  | 1 1 0  |
| Coat or double-breasted Cam-<br>bray ditto                    | 1 5 0  |
| New Patterns, Summer Trou-<br>sers, 10s. 6d. per pr. or 3 pr. | 1 10 0 |
| Summer Waistcoat, 7s. 1/2 of 3                                | 1 0 0  |
| Woolen Silk Vests and Dress<br>Waistcoat, 10s. 6d. each, or 3 | 1 10 0 |



### FIRST-RATE BOYS' CLOTHING.

|                       |         |
|-----------------------|---------|
| Skeleton Dresses      | 20 15 0 |
| Tunic and Musar Suits | 1 10 0  |
| Camlet Cloaks         | 0 8 0   |
| Cloth Cloaks          | 0 15 0  |

### GENTLEMEN'S

|   |        |
|---|--------|
| Morning Coats and Dressing<br>Gowns                                       | 0 16 0 |
| Petersham Great Coats and<br>Frog P. Jackets, bound, and<br>Velvet Collar | 1 1 0  |
| Camlet Cloak, lined all through<br>Cloth Opera Cloak                      | 1 10 0 |
| Army Cloth Blue Spanish<br>Coat, 9 1/2 yards round                        | 2 10 0 |
| Super Cloth ditto   | 3 3 0  |
| Coat or Tweed Fishing or<br>Travelling Trowsers                           | 0 15 0 |

THE CELEBRITY THE

## CITY CLOTHING ESTABLISHMENT

Has so many years maintained, being the

**BEST AS WELL AS THE CHEAPEST HOUSE,**

Reminds you a substance as to STYLE and QUALITY unnecessary. THE NOBILITY and GENTRY are invited to the  
**SHOW-ROOMS, TO VIEW THE IMMENSE & SPLENDID STOCK.**

The numerous Applications for

### REGIMENTALS & NAVAL UNIFORMS,

Have induced E. P. D. & SON to make ample Arrangements for an extensive Business in this  
particular Branch; a perusal of their List of Prices (which can be had gratis) will show the  
**EXORBITANT CHARGES** to which OFFICERS OF THE ARMY AND NAVY HAVE  
SO LONG BEEN SUBJECTED.

### CONTRACTS BY THE YEAR,

Originated by E. P. D. & SON, are universally adopted by CLERGYMEN and  
PROFESSIONAL GENTLEMEN, as being MORE REGULAR and ECO-  
NOMICAL. THE PRICES ARE THE LOWEST EVER OFFERED!—  
Two Suits per Year, Superfine, 7 7—Extra Seasony, the best that is made, 8 5  
Three Suits per Year, ditto 10 15—Extra Seasony, ditto . . . 19 6  
Four Suits per Year, ditto 14 0—Extra Seasony, ditto . . . 19 10

(THE OLD SYSTEM TO BE ABANDONED.)

Capital Shooting Jackets, 21s. The new Waterproof Cloak, 21s.

### COUNTRY GENTLEMEN,

Preferring their Clothes Fashionably made, at a FIRST-RATE LONDON HOUSE,  
are respectfully informed, that by a Post-paid Application, they will receive a Pro-  
spectus explanatory of the System of Business, Directions for Measurement, and a  
Statement of Prices. Or if Three or Four Gentlemen unite, one of the Travellers  
will be dispatched immediately to wait on them.

### STATE LIVERIES SPLENDIDLY MADE.

Footman's Suit of Liveries, 23 s. Scarlet Hunting Coat, 23 s



図版①

ばする心情を投影したものであろう。ニコラスという主人公を創作したとき、ディケンズの心情は明らかに引き裂かれたものである。次章では、ニコラスという主人公を「作品」として考えるとき、ディケンズがいかなる文学的モード、当時流行していた文学作品や現象をどのように意識していたかを検討してみるつもりである。ディケンズはこの方面でも「流行」に敏感に反応していたからだ。

## 5 ニコラス創造の背景

ここで再度、ウィティツリー夫人がケイトに読み聞かせを依頼する場面を思い出しても良いだろう。例によってソファーに寝そべりながら、夫人が開いている“a new novel in three volumes”は“The Lady Flabella”という題の当世流行の社交界小説（Silver Fork School）である。ケイトが朗読している箇所はその典型的な一場面である。

“At this instant, while Lady Flabella yet inhaled that delicious fragrance by holding the *mouchoir* to her exquisite, but thoughtfully-chiselled nose, the door of the *boudoir* (artfully concealed by rich hangings of silken damask, the hue of Italy’s firmament) was thrown open, and with noiseless tread two valets-de-chambre, clad in sumptuous liveries of peach-blossom and gold, advanced into the room followed by a page in *bas de soie*—silk stockings—who, while they remained at some distances making the most graceful obeisances, advanced to the feet of his lovely mistress, and dropping on one knee presented, on a golden salver gorgeously chased, a scented *billet*. (359)

この箇所は、女主人公が伊達男 Befillaire から求婚され、わざとらしく卒倒する箇所である。架空の小説の一場面だが、ニコラスがこのような伊達男に対するアンチとして描かれている事は断るまでもなく、マルベリー・ホーク

卿と体面する箇所では明らかになる (417)。こうしたディケンズの反発はゴア夫人 (Mrs. Gore)、ブルワー・リットン、ディズレイリ (Disraeli) 等を念頭に置いていることはハーストが指摘する通りだろう (Herst, 20)。とりわけ、ここでのキャラクターがブルワー・リットンの『ユージン・アラム』 (*Eugen Aram*, 1828) などの「バイロンのヒーロー」の系譜を思わせる (この中には『ペラム』 (*Pelham*, 1828) も加えるべきである) との指摘は、テキストの中で “A thief in fustian is a vulgar character, scarcely to be thought of by persons of refinement” (215) とこれまた流行の犯罪小説 (Newgate Novel) に対抗意識をむき出しにしていることを考えれば、妥当な指摘である。特に、1830年代という “a time of extravagance, experiment and a lively crudity” (Stonyk, 73) に満ちた、小説ジャンルの質的低下と混乱のさなかでブルワー・リットンがディケンズにとり重要な創作の指針になったことは十分考えられることである (Stonyk, 79)。

ところで、ディケンズが1848年の序文で「自然児」としてのニコラスを読者に提示したことを思い出しでも良いだろう。実際、テキストの中でもニコラスの “impetuous temper” とか、 “He is very impetuous youth. Young men are rash, very rash” (398) と評するクラムル、 “He is a very violent youth” (682) というノグズなど、ニコラスの未熟な、自然なところは異口同音に評される。また、ブレイ氏 (Mr. Bray) に異変があると、 “He burst from the room” (718) と脱兎のごとく部屋を飛び出し、その性急な性格が仄めかされる。またラルフと初対面のときも、挑発的な態度に思わず怒りで顔を赤らめてしまう (24)。振る舞いも “He acted in a manly and spirited manner” (494), “His figure was ... manly” (24) とか、その「男らしさ」と、きつぶの良さ、生まれの良さが強調される (417)。もっとも後半部分ではフランクに「男らしさ」は取って代わられるところがあるが。こうしたニコラスのある種、短兵急で喧嘩早い性格が、当時流行した社交界小説の主人公のような、弱弱しく人工的なそれとは大きく異なっていることは明白である。それにしてもここで気づかされるのは同時代の文学作品、現象に対するディケン

ズの極めて意識的な態度である。スネヴィリッチ嬢 (Miss Snevillicci) の支援者 (Mr. Curdle) がまくし立てる文学論 (312)、クラムルの一座で合った “a literary gentleman present who had dramatized in his time two hundred and forty-seven novels as fast as they had come out” (632) など、安っぽい文学作品の量産を手がける文士に対する厳しい態度は、それこそ文学の衝動的な流行に対する著者の反発である。ナッグ嬢の兄がトッテナム・コート (Tottenham Court Road) の “small circulating library” (221) で扱っているのがこの類の本だろう。ニコラスの創造もこのような文脈の中で考えるべきだろう。

それにも拘わらず、読者がニコラスから受ける印象は必ずしも鮮明ではないよう思われる。なぜなら、安定した生活と富を求めるニコラスの冒険はどちらかという受動的で、その幸運は偶然に委ねられ、本人の意志により選られるものではないからである。それは主に三つの経緯を辿る。最初のヨークシャーへの旅はラルフの斡旋によるものであり、次のポーツマス行きも途中、クラムルという旅の座長により提供されるものである。そして、ようやく三度目にロンドンに戻ったニコラスが職安の前で、偶然、ジョン・チェリブル (John Cheeryble) という、ニコラスに好意的な貿易商に出会い、運を好転させることができる。三度目の冒険 (出会い) によりニコラスは初めてよき協力者を得たと言える。ラルフは確かにニコラスに機会は与えるが、庇護者としては否定的な存在である。次のクラムル一座で役者、芝居台本の作者として機会は与えられるものの、役者という職業が市民社会では受け入れられるものでないことはクラムル一座のアメリカ行きからも分かる。つまり、三度の出会い (試練) を経てニコラスは独立、成功へのきっかけを得るのだが、この三度の出会い (試練) のあり方そのものはグリム (Grimm) 童話などに見かける試練の反復性というモチーフを思わせる<sup>9)</sup>。実際、ハリ・ストーン (Harry Stone) は、そうしたチェリブル兄弟 (the Cheerybles) のあり方を現実と夢の狭間を埋める御伽噺的な存在様式と見なし、次のように述べている。

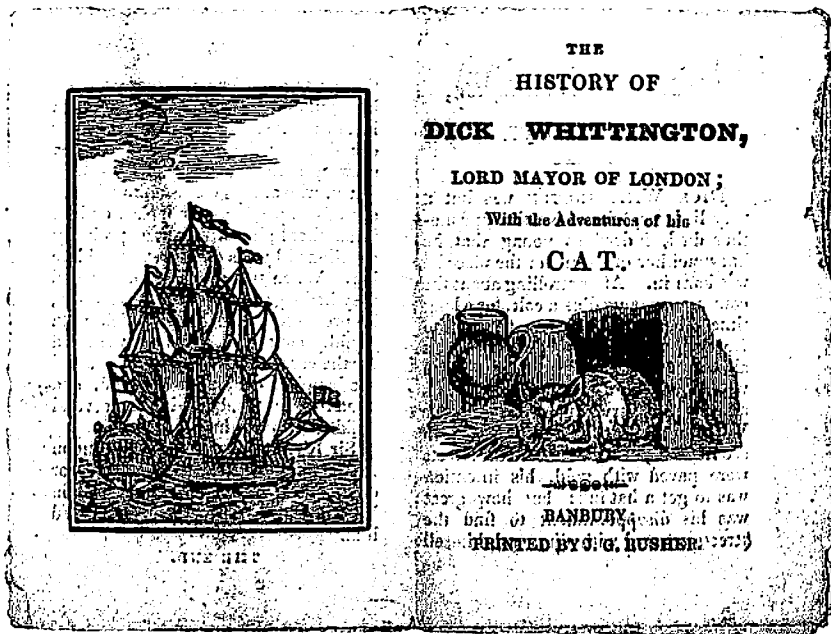


When Dickens testified that the Cheerybles were real, he invested a reassuring conception of storybook wish fulfillment with the possibility of tangible help. The fusion of fairy tales and reality—a fusion that Dickens ultimately achieved—was not to come from insisting upon the reality of fairy stories, but from using the profound insights and resonances of fairy tales to undergird and enlarge meaning. (Stone, 84)

ディケンズが当時の流行の文学上のモードを批判していたことは何度も指摘した。ただ、ディケンズの想像力に介在する文学的なモードはより民衆的な性質であり、上流階級や犯罪者を素材にした文学的な営為とは一線を画するように思われる。ストーンの言葉を借りれば“the fairy-tale energies” (Stone, 85) がそれに当たる。つまり、こうした民衆的な文学的土壌こそ、ニコラスの物語を支える基盤となるのではないだろうか。それについてはハーストが“What Nicholas indisputably does have, however, is a recognizable pedigree. His root lies deep in a fictional world at least as old as Dick Whittington” (Herst, 10) と僅かながら言及しているが、これこそニコラスはもとより、ディケンズのキャラクターを考えると、無視できない鍵概念と思われる。これほど一般民衆の成功願望を体現した「成功神話」は見当たらないからだ。問題は一方では社会に対して批判的な眼差しを向けながらも、なおかつ世俗的成功、幸福を手にする主人公を描いたのかということである。以下に述べるウィットントン伝承も、今まで長々と論じてきた階級の問題もここにおいて繋がることを見逃してはならない。

## 6 「ディック・ウィットントン」、又はヴィクトリア朝の「都市伝説」

ところで、本題に入る前に「ウィットントンと彼の猫」の話について再度まとめてみよう。19世紀もチャップ・ブックの題材として親しまれ(図版②参照)、19世紀後半にジェイコブズによって纏められたので、一般にも流布している。再度、詳しく纏めてみよう。リチャード・ウィットントン



図版② (著者所蔵)

(Richard Whittington) はヘンリー4世から5世時代に実在したロンドンの商人で、1423年に没するまでロンドン市長を三度勤めた立志伝中の人物である。但し、物語とは異なり孤児でもなく、地方の郷土の息子だったらしい。市長在任中にニューゲイト監獄の改善、公共図書館や病院の創設などに力を尽くし、“Much of Whittington’s fame was probably due to the magnificence of his charities” (Kingsford, 615) という具合で、その名声は主に慈善事業に負っている。従って、伝承とはかなり食い違っている。伝承のウィットントンとは孤児の少年として登場する。ロンドンの町が「金で敷き詰められた」(“the streets were all paved with gold”, Jacob, 167) と思った少年は、そこでフィッツウィリアム (Fitzwilliam) という人徳ある商人に雇われる。しかし、所詮、下働きに過ぎなかった少年は、友人もできず、誰からも相手にされなかった。そんな時に、気を紛らわすために飼い始めた猫が、屋根裏部屋

の鼠を退治し、それに悩まされていたウィットントンを喜ばず。やがて、貿易船を海外へ送り、交易を得る機会を得た店の主人は、召使たちに自分たちの品物を売って、儲ける機会を与える。差し出す品がなかったウィットントンは涙を呑んで、猫を差し出す。船はやがて、鼠に苦しめられている国に巡り、国王の宴席で鼠を退治する。一方、ロンドンでは猫を手放した上に、調理人に苛められたウィットントンは店を飛び出す。途中、ボウ・ベル (Bow Bell, Cheapside の St. Mary-le-Bow 教会) の鐘が「戻っておいで、ウィットントン。三度、ロンドン市長になるお方」と響くので、店へ戻る。すると、主人と船長から感謝され、島の国王から買った財宝を与えられる。そして、商いに励み、やがて相思相愛の主人の娘と結婚し、義父の商売を継ぐ。その功績が認められ、ロンドン市長にまで上り詰める、という粗筋である。以上が、有名な「ディック・ウィットントンと彼の猫」の話で、鐘の音の通り、ロンドン市長を三度、勤めるが、幸運は猫によって齎されたという趣旨である。

それにしてもなぜウィットントンなのか。ここでは、19世紀初頭ではこの物語がどう受け止められたかをまず検討してみよう。既に述べたようにディック・ウィットントンことリチャード・ウィットントンはヘンリー四、五世時代に実在したロンドンの商人である（伝承ではエドワード三世の時代になっている）。従って、かつて実在した人物に纏わる伝承ゆえに、純然たる創作と異なり、「ウィットントンと彼の猫」がある種の実在感、願望充足感を一般に与える余地があったと思われる。そしてそれは、この物語が最終的に「成功」を得る徒弟の物語だからである。これらの点が、ディケンズはもとより広く大衆の願望を刺激し、比較的馴染みのある、普遍的なキャラクターを提供する格好の素材となったと思われる。これはニコラスと伝承のウィットントンの中に幾らか共通点があることを見れば納得できるだろう。まずウィットントンは両親の居ない孤児であり、ニコラスも母、妹は居るものの片親（父）が不在のため同じである。共にロンドンの街へ機会を求めて上京し、理解ある雇い主に恵まれる。フィッツウィリアムとチェ

リブル兄弟がそれにあたるが、最大の共通点は他力本願によって幸運に恵まれることである。つまり、共に「自然児」というより「幸運児」なのである。

注意すべきことは「幸運」は本人の努力ではなく、外部の力によって齎されたのである。とりわけ、ディック・ウィットントンWhittingtonの幸運は猫という生き物によって預かったものであり、その意味では富の獲得と社会的地位の保証と安定は、必ずしも勤勉と労働の見返りとして齎されたわけではないのである。その点ではウィットントンの話はよくある勤勉と労働の見返りとして成功が保証されるという、成功神話とは根本的に異質である。それ故に、「ウィットントンと彼の猫」に対する人々の態度も微妙に異なる。例えばゴールドスミス(Oliver Goldsmith)などは猫の存在が余程、目障りだったのである。"Oliver Goldsmith, of all persons, proposed that Whittington should be deprived of his cat and recognized only as an example to industrious apprentices" (Darton, 96) とピューリタニズムの影響を受け、無粋な提案をしているほどである。多くのチャップ・ブックなどにあたるすべはないのでいかんともしいが、やがて北部工業地帯でウィットントンを扱ったチャップ・ブック、バラッド等が出回るようになる。それらが"democracy and the Puritan virtues of diligence, thrift and patient attendance to one's duty" (Piper, 56) を謳歌するようになるにつれ、ウィットントンの物語も単なる「幸運児」の物語から、ブルジョワの価値観に合致した、勤勉の見返りとしての財産と地位の獲得を主張する成功物語へと変容を遂げたものと思われる。とは言えディック・ウィットントンを巡る言説は、受け手の欲望を刺激する部分もあるため必ずしも一様ではなかったと思われる。トーマス・キートリー(Thomas Keightley)が、19世紀半ばになってもその伝承の人気の根強さをしているが、それが示すのはこの物語が及ぼす負の影響である。

It is strange what a propensity the vulgar have for assigning some other

cause than industry, frugality and skill, seconded by good fortune (the usual and surest road, I believe, to wealth), to the acquisition of riches. I hardly ever knew, in my own country, an instance of the attainment to opulence by a man who, as the phrase goes, had risen from nothing, that there was not some extraordinary mode of accounting for it circulating among the vulgar. The simplest and most usual explanation of the phænomenon, was to assert that he had gotten a treasure in some way or other. (Keightley, 248)

キートリーの引用は、とりわけこの物語が「粗忽な」(“the vulgar”)な連中の間で根強い人気がある事を示している。これが受容される背後には、単にウィットントンを幸運児と考え、軽視する福音主義的な思考を持った人たちの他に、口にごそ出さないもののそれを当てにしている怠惰な者、そして羨望の眼差しで見る者など、物語が様々な人間の欲望のはげ口になっていることを示唆している。それでは、こうしたウィットントンに対する愛憎半ばする心情は、ニコラス（とその創造）にはどう関わりを持つのだろうか。或いは、全く無関係なのだろうか。ニコラスを財産継承の観点から考察し、結論とする。

## 7 ニコラス、又は佇む主人公

ここでニコラスの財産相続についてチェリブル兄弟が果たす役割を見てみよう。35章でニコラスがジョン・チェリブルに会い、即日で商會に雇われることが決まる(457)。彼らの手助けはそればかりではない。甥のフランク(Frank Cheeryble)ではなくニコラスにマデラインへの連絡役を託し、結果的にニコラスに彼女と接する機会を与える。マデラインは父親の借金のため、守銭奴のアーサー・グライド(Arthur Glide)との結婚を余儀なくされそうになるが、父親の急死により、その場をニコラスらに救出される(718)。やがて、マデラインの財産は回復される。自分の指示に従わない場合は財産の相続を認めないという遺書を残した父親は、後悔して新たに書き

換えた遺書を残す。マデラインとニコラスの間に愛情が介在することを認めたチェリブル兄弟は“Madeline’s heart is occupied. Give me your hand, sir, ...” (812) と述べ、二人の結婚を後押しする。そして、フランクはケイトと結婚することになる。結婚して暫くすると、ニコラスは商会を継いだフランクの共同経営者となり、“the Firm of Cheeryble Brothers”は“Cheeryble and Nickleby”となる。そこで、ニコラスが最初に行った行為は“the first act of Nicholas, ... was to buy his father’s old home” (830) と、父親が手放した土地を入手し、その無念を晴らすことである。これによって、ニッケルビー一家は物語以前の状態、つまり以前の「体面」を取り戻すことができたわけである。

ところでこの「体面」の問題は、ニコラスの共同経営者就任により彼とプレイ娘がお互いに財政的に釣り合うように意図されている事にも注意すべきであろう。そのために、ニコラスは結婚を介して、財産を（幸運にも）得たという批判がある程度免れることが出来たのである。これはテキストに見られる金銭づくの結婚への批判、例えば“match-making mothers” (341), “good, rich, substantial men who would gladly give their daughters” (714) といった金目当ての結婚を目論む親子や、それに寄り添うように若いラルフの打算的な結婚 (787-8) が紹介されているため、批判が必要と意識されたのだろう。チェリブル兄弟の助力でニコラスはこのような批判から免れている。しかも、ラルフの残した遺産には手を着けないために (830)、金のために愛情を犠牲にしたラルフへの批判は更に徹底されることになる。とは言え、このような「継承」の仕方が、ニコラスに自立性と独立性を与えるものでないことは言わずもがなである。子供たちを見て“they have expectations” (465) と言っていたケンウィッグズが伯父リヴィックの結婚を聞き、一家が恐慌状態に陥る箇所がある。これなどは『遺産』で取り上げられる、他人の財産を当てにして生きることの愚かさを風刺したものである。つまり、ニコラスの「継承」のあり方そのものが、一方では主人公とヒロインの愛情を成就させるためにウィットントン的な継承を必要としながら、他方にお

いてはそのような遺産の「相続」のあり方を批判しているという、「矛盾」を犯しているのである。ここにニコラスという主人公を巡る居心地の悪さ、据わりの悪さが在るといえないだろうか (Costell, 124)。それでは、なぜこのような「矛盾」に陥ったのだろうか。

それでは、ディケンズはウィットントンの伝承をどのように見ていたのであろうか。ウィットントン神話は概ねディケンズでは批判の対象となっている。有名な例は『ドンビー』のウォルター・ゲイ (Walter Gay) 少年だが、その前では『ベントレー誌』 (*Bentley's Miscellany*) に1837年1月に発表した『タランブル氏の公的生涯』 (*Public Life of Mr. Tulrumble*) という小品で扱われているに過ぎない。ただ、批判されるのが勤勉の見返りとしての世俗的幸福を謳歌する単純な、ややもすればそれによって労働を強要するような硬直したピューリタンの側面なのか、それともニコラスのように (結果として) 「幸運」を期待する側面なのかは、この時点では判然とせず、ディケンズの態度も微妙なぶれがあるように思われる。ディケンズがウィットントン伝承に具体的に言及し、大規模な形で取り組むのは、『ドンビー』が初めてである。しかし、「生のまま」から生じたというニコラスは、一見、快活な外見 (これも紋切り型だが) にも関らず、後の主人公が直面する相続、階級の問題がニコラス自身の問題として意識されることがないまま、回避されてしまったといえないだろうか。なぜなら『ニコラス』においては財産を継承することに対する「罪の意識」が不在なため、勤勉とその見返りとしての富の獲得というブルジョワ的な価値観に批判が加えられることはないからである。従って、この段階では「矛盾」が「矛盾」として意識され、相対化されるまでには至っていない。この価値観に批判が加えられるのは「記憶」により「過去」と向き合い、それに内包される諸問題を客観視する「自伝性」が獲得されてからであろう。「記憶」については“the best and purest link between this world and a better” (65) といわれているが、それが生を検証し「罪の意識」を生じるまでにはこのテキストではなされていない。それを得て初めてディック・ウィットントンは無邪気な「幸運児」的な徒弟か

ら、「勤勉」を絵に描いたようなフランシス・グッドチャイルド (Francis Goodchild) や、そのアンチとしての怠惰なトム・アイドル (Tom Idle) 又はジョージ・バーンウェル (George Barnwell) へと「罪の意識」を伴いながら変容を重ね、テキストも緊密の度合いを強めていくのである。もしも、ディック・ウィットティントンのニコラスに有機的な「罪の意識」を求めても、この主人公の中には見当たらない。従って、ニコラスが徒弟的な相続を主人公のテーマとすることで新たなキャラクターを生み出す契機となったとしても、ニコラス本人はその道のかなたに佇んでいることを理解すべきである。

#### 注

- 1) 例えば『オリヴァー』でニコラスのような青年のキャラクターを探すとするとハリー・メイリー (Harry Maylie) だろう。彼とローズ・メイリー (Rose Maylie) のロマンスはローズの身元回復と実母アグネス (Agnes) の名誉回復を側面から促す役割があるものの、ハリー自身は印象の希薄な人物である。従って、静的な人物像である。『ピクウィック』も主人公ピクウィック本人は中年の主人公であり、この範疇に入らない。ニコラスに近いのはウィンクル (Winkle)、タップマン、サム・ウェラーだろうが、彼らの役割はせいぜいのところ喜劇的な挿話を橋渡しするだけである。ウェラーはピクウィックにあまりに従属的であり、ニコラスのように独立した存在とは認められにくい。

なお『オリヴァー』に関しては拙論参照。「『オリヴァー・ツイスト』: オリヴァーとマンクス、又は二人の徒弟と異母兄弟の物語」(Mulberry, 52号, 2003年3月)

- 2) 『オリヴァー』と『ニコラス』は分冊の執筆、刊行が重なっている。厳密に言えば執筆というより分冊刊行時期である。『ニコラス』の分冊で言えば分冊1から13 (42章まで) までのかなりの長期にわたる。途中、ヨークシャーの学校批判は分冊4でニコラスがロンドンへ戻ってきてから、その意図は薄れたといわれる



が、「ニコラス」に専念できるようになるまで、なかなか方向性が定まらなかった事は確かなようだ。ディケンズがこれ以降は作品の二重執筆を控える要因にもなったと言われる (Monod, 140-3, 169)。

- 3) 一方で、この頃のディケンズの密かな悩みは父親であったという。ディケンズが著名作家になるや、息子の収入を当てに日銭稼ぎに出版社をはしごしていたと言う。ディケンズはそのために1839年にデヴォンシャーへ赴き、両親用の家を捜し求めたという。テキスト後半部分のスマイクのデヴォンシャー行きにそれが反映されていることは言うまでもないだろう (Monod, 157)。つまり、私生活においてもディケンズはその綻びを免れるために「体面」を繕う必要に迫られていたのである。
- 4) ニコラスのスモレット的な主人公からの変わりようは、35章での職安でのジョン・チェリブルとの出会いがきっかけであると指摘されている (Cotsell, 122)。確かに、テキストもピカレスク小説に見られるイン (inn) から職安 (Registering Office) へ移行したことは、相続など財産へ巡るテーマへとテキストが移行したことであり、その意味ではこの指摘は正しいだろう。しかし、ニコラス自身の変わりようはフランク・チェリブルの出現にも負うところが大きいのではないだろうか。フランクの性格についてはチェリブル兄弟が“Frank is a heedless, foolish fellow” (800) と「粗忽者」呼ばわりしていることから明白である。そして、何よりもフランクが始めて登場するのが職安の若者と華々しく喧嘩をしているところをニコラスに目撃されている箇所である (555-8)。フランクは余り注目されていないが、こと後半部分ではスマイクに代わって、ニコラスの身分的な役割を担うようになるのではないだろうか。後半部分のニコラスの快活な性格はフランクの出現により、和らげられたところがある。
- 5) ハリー・ストーンは自著の中で「ニコラス」等のディケンズ初期の小説について「徒弟小説」(“the Apprentice Novels”) という極めて簡便な名前を付けているが、四章でその表題 (“Fairy Tales and the Apprentice Novels”) に用いているにも拘わらず、二ヶ所で触れているだけで定義されていない。恐らくカーライル (Carlyle) によるゲーテ (J. W. v. Goethe) の『ウィルヘルム・マイスターの遍歴

時代』(Wilhelm Meisters Lehrjahre, 1795)の英訳の表題を参考にしたと思われる。ただ合意するところは、所謂ドイツ的な「教養小説」よりも「徒弟的な主人公」(これも検討の余地があるが)が様々な試練(労働)を乗り越え、世俗的な幸福(栄達)を獲得するまでの経過、経緯を描いた小説と理解したほうが良いのではないだろうか。イギリス小説の見地から「教養小説」の概念は一度、検討が必要かもしれないが、ドイツの教養小説に見られる心理分析による人物の内面化とか目的としての「円満な人格」、主人公が目指すところの諦念といった心境とは、イギリスの小説は無縁のように思われる。そもそも、当時のドイツには個人が因習や階級の障壁を乗り越えて、世俗的な栄達を達成する「成功物語」を生むような、文化的な土壌は脆弱ではなかったのだろうか。ディケンズの研究書の中には、「教養小説」という概念を使っているのがたまに見受けられるが、個人の勤勉、栄達を積極的に肯定するような文化ではドイツ流の「教養小説」は成り立ちようがないような気がする。従って、極論すればヴィクトリア朝のイギリスでは一人のケラー(Gottfried Keller)もシュティフター(Adalbert Stifter)も生まなかつたし、その必要もなかつたわけで、逆に19世紀ドイツでは一人のディケンズも生まなかつたといえないだろうか。

なお、「教養小説」については次の論文を参考にした。発表年代の古さは、必ずしも内容の古さを意味するものではない。

義則 孝夫、「ドイツ教養小説初期の展開」、1961、2 人文研究XII、2。(大阪市立大学文学会)

義則 孝夫、「教養小説と発展小説」、1963、12 人文研究XIV、11。(大阪市立大学文学会)

#### 参考文献

CotSELL, Michael. "Nicholas Nickleby: Dickens's first young man," in *Dickens Quarterly*, no. 3 (1988), 118-128.

Darton, F. J. Harvey. *Children's Books in England*. Cambridge: Cambridge UP, 1932.

- Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby*. Oxford: Oxford University Press, 1990.
- Gilmour, Robin. "Between two worlds: Aristocracy and gentility in *Nicholas Nickleby*," In *Dickens Quarterly*, no. 3 (1988), 110-118.
- Herst, Beth. *The Dickens Hero*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1990.
- Jacobs, Joseph. *English Fairy Tales*. London: Everyman's Library, 1993.
- Keightley, Thomas. *Tales and Popular Fictions: their resemblances, and transmission from country and country*. London: Whittaker, 1834.
- Kingford, C. L. "Whittington, Richard." In *The Encyclopedia of Britannica*, vol. 28 London: 1911.
- Lucas, John. *The Melancholy Man: a Study of Dickens's Novels*. London: Harvester Press, 1970.
- Monod, Sylvere. *Dickens the Novelist*. Norman: U. of Oklahoma Press, 1968.
- Page, Norman. *A Dickens Companion*. London: Macmillan, 1984.
- Piper, H. D. "Dick Whittington and the Middle Class Dream of Success." In *Heroes of Popular Culture*. Eds. R. B. Brown, M. Fishwick and M. T. Marsden. Ohio: Bowling Green University Popular Press, 1972.
- Raina, Badri. *Dickens and the Dialectic of Growth*. Wisconsin: The University of Wisconsin. 1987.
- Schlicke, Paul. "Introduction" to *Nicholas Nickleby*. Oxford: Oxford U. P. 1990.
- Slater, Michael. *The Composition and Monthly Publication of Nicholas Nickleby*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1982.
- Sombart, Werner. 『恋愛と贅沢と資本主義』. 金森 誠也訳 東京: 論創社, 1987. Trans. of *Liebe, Luxus und Kapitalismus*, Leipzig: Duncker und Humblot, 1922.
- Stone, Harry. *Dickens and the Invisible World*. Ann Arbor: Michigan, 1988.
- Stonyk, Margaret. *Nineteenth-Century English Literature*. London: Macmillan, 1983.
- Tillotson, Kathleen. *Novels of the Eighteen-Forties*. Oxford: Oxford University Press, 1961.

義則孝夫. 「ドイツ教養小説初期の展開」 人文研究12, 2. 大阪市立大学文学会, 1961.

義則孝夫. 「教養小説と発展小説」 人文研究14, 11. 大阪市立大学文学会, 1963.